第八章　夜高曳山行事の保存と継承

第一節　夜高行燈作成の材料の調達先の変化

福野夜高祭の大きな特徴として、祭りの最後に「引き合い」が行われて吊物や山車を壊しあうことが挙げられる。そのために毎年壊された箇所を修復する必要があり、染料・真竹・糊・和紙などを調達しなければならない。以前は福野町近辺で材料を調達していたが、昔ながらの調達方法を維持できない所も出てきた。そこで、各町内では行燈の材料の調達先について様々な試行錯誤を重ねてきている。

真竹

行燈の枠組みとなる真竹については、以前は各町内の若者が安居の竹林に直接調達にいっていた。雪が積もり始める一二月前には真竹を伐採して町内に持ち帰り、翌年の行燈作成に使用する。各町内には真竹を均等な長さに割る金具もあり、使用する場所にあわせて真竹を加工したという。しかし人口減少によって若衆が少なくなると、ほとんどの町内が御蔵町にあり造園工事を営む雅環境造形（写真1）に真竹の調達を依頼するようになっている。

雅環境造形も行燈での用途を熟知しているため、各町内の要望にあわせて真竹を加工し、提供を行っている。雅環境造形では七寸（四本束）・八寸（三本束）の真竹八メートル弱を四センチメートルから一センチメートル程度の間隔の幅で分割し、各町内に販売している。販売単価は切り分けた長さで変わり、四センチメートルであれば七二〇円、一センチメートルであれば四八〇円となる（令和七年度現在）。販売量は年によって変動するが、近年では七町内全体で一〇万円～一五万円分の真竹を販売している。

和紙

行燈に貼る和紙については、以前は各町内にある紙屋もしくは提灯屋を通じて調達していた。例えば、上町では七津屋で提灯貼りをしていた浦野商店から、新町では横町にあった沢崎紙屋から、横町や辰巳町などでは横町にあった岡田表具店から、といった具合である。次第に各町内の紙屋・提灯屋がなくなっていくと、調達先について各町内で模索されたが、現在ではほとんどの町内が同じ南砺市内の五箇山和紙の里（写真2）から購入するようになっている。ただし、七津屋のみは今でも表具店竹原文林堂（もとは七津屋町内にあったが、現在は南砺市二日町に移転）から調達している。

和紙の材質については、ただ丈夫なだけでは駄目で、行燈作成時に加工しやすいことが重要となる。基本的に行燈用の和紙を切る際にはハサミなどの刃物ではなく、水を付けた筆で線を引き、そこを破いて切るようにしている（四章一節参照）。この際、安い和紙だと上手く破けないことが多く、その分行燈の作成期間が長くなってしまう。現在、多く

1. 御蔵町の雅環境造形

2. 五箇山和紙の里（道の駅たいら）

の町内が用いている五箇山和紙は一般の和紙よりやや高額であるが、破いて切るという作業を行いやすく、このために多くの町で採用されるに至っている。

五箇山和紙の里からの和紙の購入量について、例えば浦町では令和六年度に一枚五六〇円（単価は紙の厚みによって変動する）の和紙を四五〇枚購入している。和紙の購入量は年度によって変動するが、一度に数百枚の和紙を販売するのは五箇山和紙の里にとっても大口の販売と位置づけられている。

紅

行燈を彩る紅（染料）も、かつては各町内のタバコ屋や提灯屋といった商店を通じて調達されていた。また、現在の福野体育館一帯に昔は北国染工があり、七津屋・浦町などでは北国染工に務める社員を通じて紅を調達していた。

しかし他の材料同様、各町内の商店がなくなっていくと調達先が模索され、近年では多くの町内が浦町の木沢薬局を通じて購入するようになっている。ただし、木沢薬局自体も令和四年（二〇二二）に廃業してしまったため、現在は元木沢薬局の店主で、薬剤師の資格を有する方に個人的に調達を依頼する形となっている。

蝋

蝋の調達についても、紅とほぼ同様で、現在は多くの町内が元木沢薬局の店主を通じて購入するようになっている。基本的には和蝋が用いられているが、一部の町内ではパラフィンが用いられるようになっている。ただし、昔ながらの和蝋は固まると茶色がかった色となるが、パラフィンは真白のままのため、どこに塗ったかわかりづらいといった問題もある。

和蝋を溶かす際には、昔は雪平に入れてストーブの上に置き、溶かすというやり方を行っていた。しかしこのやり方では火の始末が面倒な上危険なため、現在ではフライヤーで溶かす町内がほとんである。

糊

糊については、昔から市販の洗濯のりを溶かすというやり方で、調達先にも大きな変更はない。ただし、横町のみは岡田表具店が特別配合した糊を長らく用いてきた。しかし糊を作成してきた当主が令和六年（二〇二四）に亡くなられたため、調達先を検討中である。

全体を通して

夜高行燈作成の材料の調達先の変化を全体的にみると、昔は原料が共通する提灯屋から調達することが多く、戦後に提灯屋が姿を消していったのが大きな転機となったようである。他町・他市にはまだ提灯を作成している所もあるが、現在大量生産される提灯の材料はそのまま行

3. 曳山車輪に挟み込むヒノキ材

4. 新町曳山山人形の修繕

燈に用いることができないものが多く、各町内では原材料の調達先に工夫をこらしてきた。

行燈の材料の品質については、単に見栄えの問題だけでなく、行燈作成の工期にも影響してくるため、各町内では調達先について試行錯誤してきている。現在、ほとんどの町内が和紙は五箇山和紙の里から、紅・和蝋は元木沢薬局の店主から購入するようになっているのは、より行燈作成に適した材料調達を模索し続けた結果であると言える。

なお、曳山については、夜高行燈のように毎年維持管理のために調達しなければならない資材は多くないが、車輪の軸に差し込むヒノキ材のみは毎年取り換えを行っている（写真3）。このヒノキ材は独特の軋音を出すためのものであるが、一日の引き廻しですぐにすり減ってしまうため毎年の交換が必要となる。

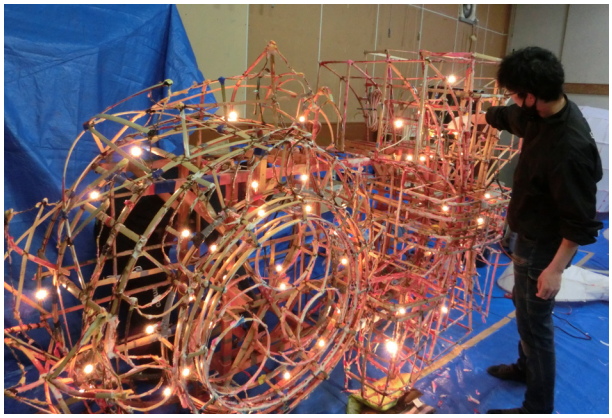
また、曳山の大がかりな修繕が必要となった際には南砺市市指定文化財保存事業補助金の名目で市が補助を行っている。市指定文化財保存事業補助金については、令和元年（二〇一九）に横町の車輪修繕に補助金を交付した実績がある。

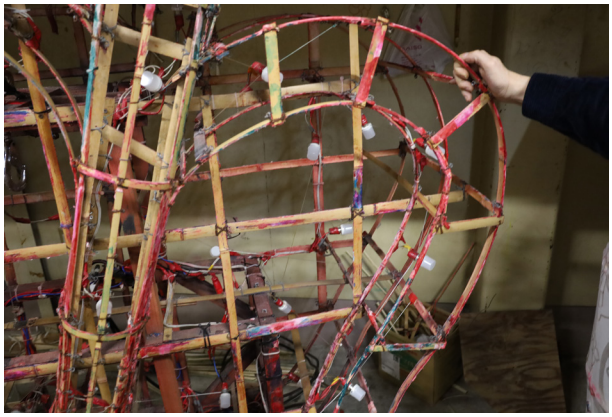
その他に、文化庁の地域文化財総合活用推進事業補助金を受けての修繕も行われている。令和四年度には、四基の曳山全てが補助を受けて修繕を実施し、上町・七津屋は曳山車輪及び庵屋台屋根の補修、新町は山人形衣装（写真4）及び曳山各部の修繕、浦町・辰巳町は勾欄の漆塗り直し及び曳山車軸の補修、横町は曳山勾欄・後塀の漆塗り直しを、それぞれ実施した。令和五年度は、上町・七津屋が曳山の船鉾の修繕を、横町が曳山の錺金具と行燈各部の修繕を、それぞれ同補助金を受けて実施している。

第二節　夜高行燈のＬＥＤ化への流れ

もともと、夜高行燈の灯りには蝋燭が用いられており、これが戦後になって電球に徐々に移行し、令和に入ってからは次第にＬＥＤの導入が進むという過程を経ている。

蝋燭から電球への移行、電球からＬＥＤへの移行は、ともに一斉に行われたわけではなく、段階を踏んで実施されてきた。夜高行燈発展の歴史を見ると、田楽を中心として大型化していったものであり（一章二節参照）、現在でも田楽が行燈の中核部分として重要視されている。そのため、蝋燭から電球に移行する際にはまず山車や吊物が先に行われ、田楽が電球に移行したのは最後であったという。また、一部の町内では電球に移行した後も田楽にのみは蝋燭を立てる場所を残しており、浦町・辰巳町のみは今でも田楽には電球を入れず蝋燭に火をつけている。行燈の上に上がるのは二人のみというのも、本来は行燈の上の蝋燭を管理す


5. 豆電球配線（浦町）


6. LED の配線（辰巳町）

る係として定められたものであり、行燈の蝋燭の管理が重視されていたことがうかがえる。

電球からＬＥＤに移行するに当たっては、多くの町内で行燈の色合いが変化することが懸念された。そこで、まずチビ行燈に導入して様子を見たうえで、次第に大行燈にもＬＥＤを導入するという形を取った町内もある。辰巳町では、異なる大きさのＬＥＤをそろえて、実際に行燈の枠組みの中に入れて比較しながら導入するＬＥＤの規格を決めたという。

ＬＥＤそのものは電球を購入するより高くつくが、必要なバッテリーが減るため総合的には安上りとなる。一方で、バッテリーが減ると行燈の重量バランスが崩れるという別の問題も発生し、町内によっては重し（鉄棒など）を載せて調整を行っている。

第三節　祭りに携わる人々の変化

少子高齢化による人員不足を背景として、昔に比べると役員の再選が行われるようになったり、町内出身者・縁故者に協力を仰ぐようになる、といった変化がみられる。ただし、変化の内容については町内ごとの事情に基づいて様々である。

ほとんどの町内で見られる取り組みが、町内の出身者やその家族を縁故者として招くことである。例えば、横町では町外在住の縁故者を「特別会員」として参加させているという。ただし、町内の者と違って町外在住者は夜遅くまで参加できない人が多く、練り廻しの後半や片付けまでは手伝ってもらえないという問題もある。特に横町は他の町内と違って東西の移動距離が長いため、町内の練り廻しを優先して行い、一区切りをつけてから後半の練り廻しを行う、といった対策を行っている。

町外の人の協力という点では、辰巳町が砺波市鹿島地区と、上町が砺波市新富町と、それぞれ人員協力を行うという取り組みを行っている。上町は、個人的な縁から福光・城端出身者で長く協力している人もおり、裁許まで務めている。

一方、福野夜高祭固有の問題として、祭りの目玉である「引き合い」をはじめとして、行燈の練り廻し時には衝突・落下の危険性があるため当日のみの参加が避けられる、という点が挙げられる。例えば、御蔵町では、もともと行燈を出す七町内の中で最も人口の少なかったことから、早くから町内の縁故者のみならずその友人なども含めて行燈の練り廻しに参加してもらっている。それでも行燈の上にあがる場合には、必ず作成から関わってもらって行燈の構造を理解した上で、祭り当日に行燈に上がってもらっているという。

第四節　南砺市合併後の変化

第一項　南砺市と夜高曳山行事との関係

平成一六年（二〇〇四）一一月に福野町は近隣の七町村と合併し、南砺市が成立した。同年中には福野夜高祭が富山県指定無形民俗文化財に、曳山が町有形文化財に指定されて、現在まで引き継がれている。

市町村合併後最大の変化は、それまで祭りの振興に大きな役割を果たしてきた福野町商工会が南砺市商工会（写真7）に合併したため、それまでのように深く祭りに関わることができなくなったことである。そこで、商工会が担っていた役割を継承するために組織されたのが福野夜高祭連絡協議会である（第四章三節参照）。以後、福野夜高祭連絡協議会は福野夜高祭保存協議会に統合されるまで、ポスター作製等の広報業務、協賛金・寄付金集めや観光客に対する様々な取り組みに従事してきた。

南砺市は直接福野夜高祭の運営に携わることはないが、イベント補助金の交付を毎年行っている他、場所の提供や物品の貸出などを通じて間接的に祭りの支援を行っている。例えば、福野の中心部では大型の駐車場が限られるため、福野市民センター（旧福野町役場）の駐車場を観光バスの停車場所として毎年貸し出している。この他、福野市民センター（旧福野町役場）玄関には田楽を取り付ける箇所と田楽専用のコンセントがあり、祭り期間中の夜間には明かりが点される（写真８）。

曳山の修理などについては、先に触れた通り南砺市指定文化財保存事業補助金の名目で市が補助を行っている。令和七年度には横町が曳山の山蔵を新設することとなり、工事費約三、〇〇〇万円の三〇パーセントにあたる九二四万円を同補助金の名目で支給している。

また、南砺市では令和三年（二〇二一）より高校生が地域の活性化に挑戦する「ボクなん」プロジェクトが実施されており、その一環として福野の上町通りの古民家を借りて改修し、「ボクなんハウス」として活用している（写真９）。令和六年には「ボクなん」で作成したオリジナルグッズを夜高祭の期間中にボクなんハウスで販売する取り組みが行われ、町外の若い世代が夜高祭に触れる機会を提供した。

7. 現在の南砺市商工会福野事務所

8. 南砺市役所福野市民センターの田楽

第二項　コロナ禍中の練り廻し中止からの復興

令和二年（二〇二〇）には世界的に新型コロナウィルス感染症が大流行し、日本においては二月末から全国の小中高に臨時休校が要請され、四月七日には政府による最初の緊急事態宣言が出されるに至った。このような情勢下で福野夜高祭の代表者会議が四月四日に福野神明社で開かれ、この年の行燈練り廻し・曳山巡行は中止、五月二日の春の例祭の祭礼のみを例年通り実施することが正式に決定された。大勢の人が集まる事に厳しい目が向けられる中で、春の例祭のみであっても例年通りの形

9. グッズ販売を行う「ボクなんハウス」

10. 絵馬堂に集合した各町裁許（令和３年）

で実施されたのは、夜高曳山行事という伝統を絶やしてはならないという強い想いがあってのことであったという。行燈の練り廻しの中止は戦後初のことであり、地元新聞でも大きく取り上げられ、当時の当番裁許長の「言葉で言えるような状況ではない」という無念さをにじませる言葉が載せられている。

令和三年も引き続き新型コロナウイルス感染症の感染拡大への懸念の声は大きく、四月五日に規模を大幅に縮小して開催することが決定された。具体的には、五月二日に各町内の代表者らが小型の田楽行燈や提灯を持って福野神明社を参拝し、当番裁許である横町のみが小行燈二本を町内で練り廻すが、大行燈の練り廻しや三日の曳山巡行は昨年同様に中止とされた。ただし、各町内の有志によって祭礼当日にはミニ行燈や田楽の展示も行われている。

この年の二日の例祭では各町内から裁許提灯を持つ裁許が一名ずつ集まることとなり（写真１０）、当番町の横町が小雨の中境内の参道で各町裁許を迎えた。絵馬堂に全町の裁許が揃ったところで拝殿へ案内され、先に到着していた敬神会役員、連絡協議会役員とともに例年通りの例祭が執り行われた。一七時になるとまず横町裁許・若衆頭が福野神明社を参拝し、その後新町、御蔵町、上町・七津屋、浦町・辰巳町の順番で各町内の代表者らが小型の角行燈や提灯を持って福野神明社を参拝した（写真１１）。一八時一五分頃より横町の小行燈二本が出発し、四つ角交差点を経て横町通り、福野神明社、町内で練り廻しを行った（写真１２）。三日には上町・七津屋で山蔵の開放、その他の町内では山人形の展示が行われ、神輿渡御も実施された。

令和四年にはマスク着用の徹底、観光客の制限等、感染防止に細心の注意が払われた上で三年ぶりに大行燈の練り廻しが行われた。マスクをしての行燈練り廻しは若衆にとって負担であったようであるが、大行燈練り廻しの復活を歓迎する声が当時の新聞記事に掲載されている。令和五年には観光客の制限等がなくなり、露店や夜高太鼓の特設ステージも復活してコロナ禍以前の福野夜高曳山行事の形式に戻り、現在に至っている。

コロナ禍の間、関係者の間で強く意識されたのは祭礼としての夜高曳山行事の本質的なあり方とは何か、という点である。令和二年には春の例祭祭礼のみ、令和三年にはそれに加え小型の角行燈や提灯を持っての参拝が優先的に行われたというのは、夜高曳山行事の関係者が祭礼の本質をどのように認識していたかを如実に語っている。関係者の間では、「感染対策から行燈練り廻しが中止になることがあっても、祭礼そのものが中止されることはありえない」との声もしばしば聞かれた。コロナ禍中の祭礼のあり方を検討する議論は、今後の福野夜高曳山行事のあり

11. 神明社に参拝する七津屋の代表（令和３年）

12. 横町の小行燈練り廻し（令和３年）

方を考えていく上でも重要になっていくと思われる。

また、令和二年の練り廻し中止を決定するに当たり、中止を最終的に決定する組織が定まっていないことが問題となった。そこで新たに「福野夜高祭関係団体代表者会議」が組織され、この代表者会議によって中止が決められた。この代表者会議はコロナ禍が収まった以後も、関係団体の情報共有を目的として毎年一回継続して開催されるようになった。出席者は各町内の代表者・氏子総代・関係団体（夜高祭保存協議会・福野中部まちづくり協議会・福野曳山保存振興会・越中夜高太鼓保存会・屋台囃子保存会）の会長・当番裁許長予定者・敬神会庶務等で、進行は夜高祭連絡協議会（後、福野夜高祭保存協議会）事務局が担っている。

13. 福野夜高祭保存協議会発足を決める会合

14. 保存協議会事務局（福野中部交流センター）

第三項　福野夜高祭保存協議会の成立

令和六年（二〇二四）一二月二一日、福野夜高保存会と福野夜高祭連絡協議会は統合されて福野夜高祭保存協議会が発足した（写真１２）。既存の連絡協議会の組織の中に、旧保存会が「保存部」として組み込まれた形となる（図１・図２参照）。これより先、南砺市では小規模多機能自治の取り組みの一環として平成三〇年（二〇一八）に昭和の合併以前の旧町村ごとに地域づくり協議会が設置され、福野町地域には福野中部まちづくり協議会が組織された。福野夜高祭保存協議会の事務局は、福野中部まちづくり協議会の施設である福野中部交流センターに置かれている（写真１３）。

統合によって扱う予算の総額も増え、今まで以上に福野夜高曳山行事の保存継承にかかる取り組みを進められるようになっている。一例として、既に描ける者の少なくなってきた武者絵の教室が福野夜高祭保存協議会によって令和七年（二〇二五）から新たに始まり、後継者育成が図られている（写真１４）。講師は福野夜高祭保存協議会に属する者が

15. 武者絵教室の様子

16.『武者絵教室』作品展（ア・ミュー）

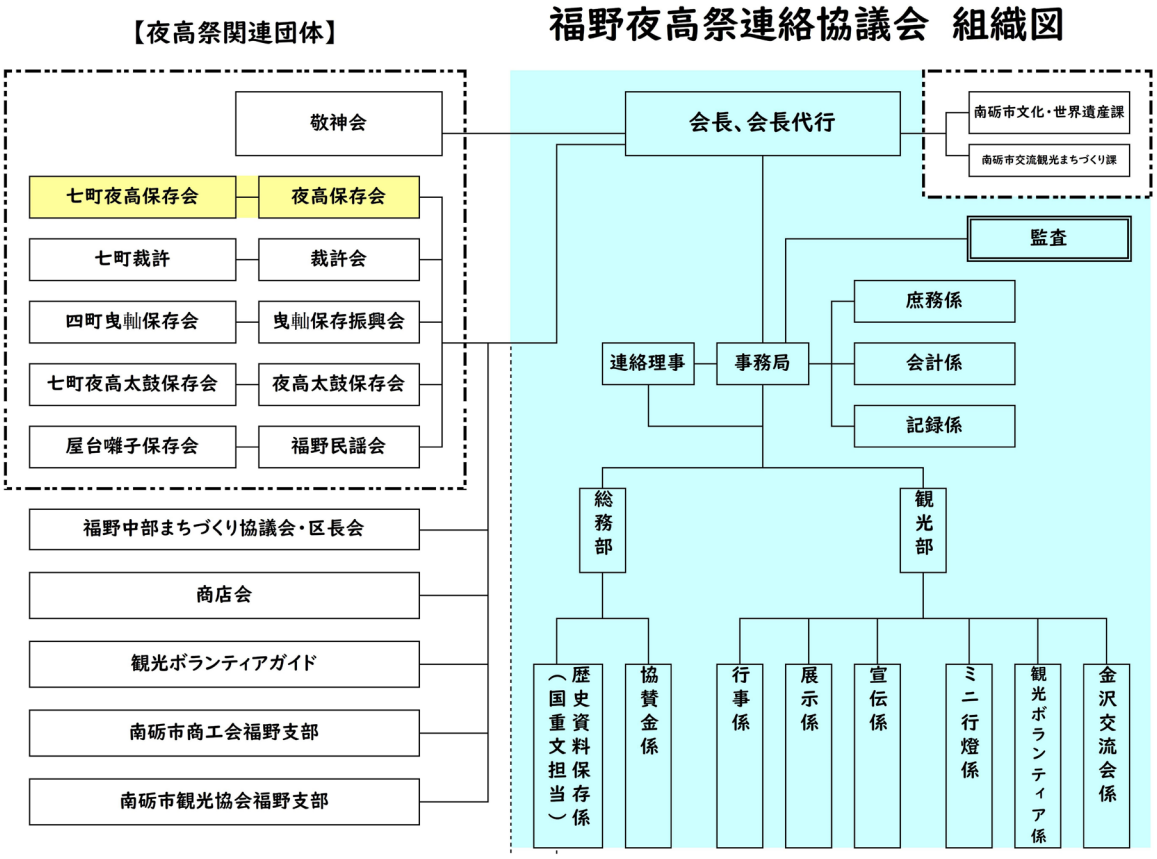


図 1. 福野夜高祭連絡協議会（～ R6）組織図

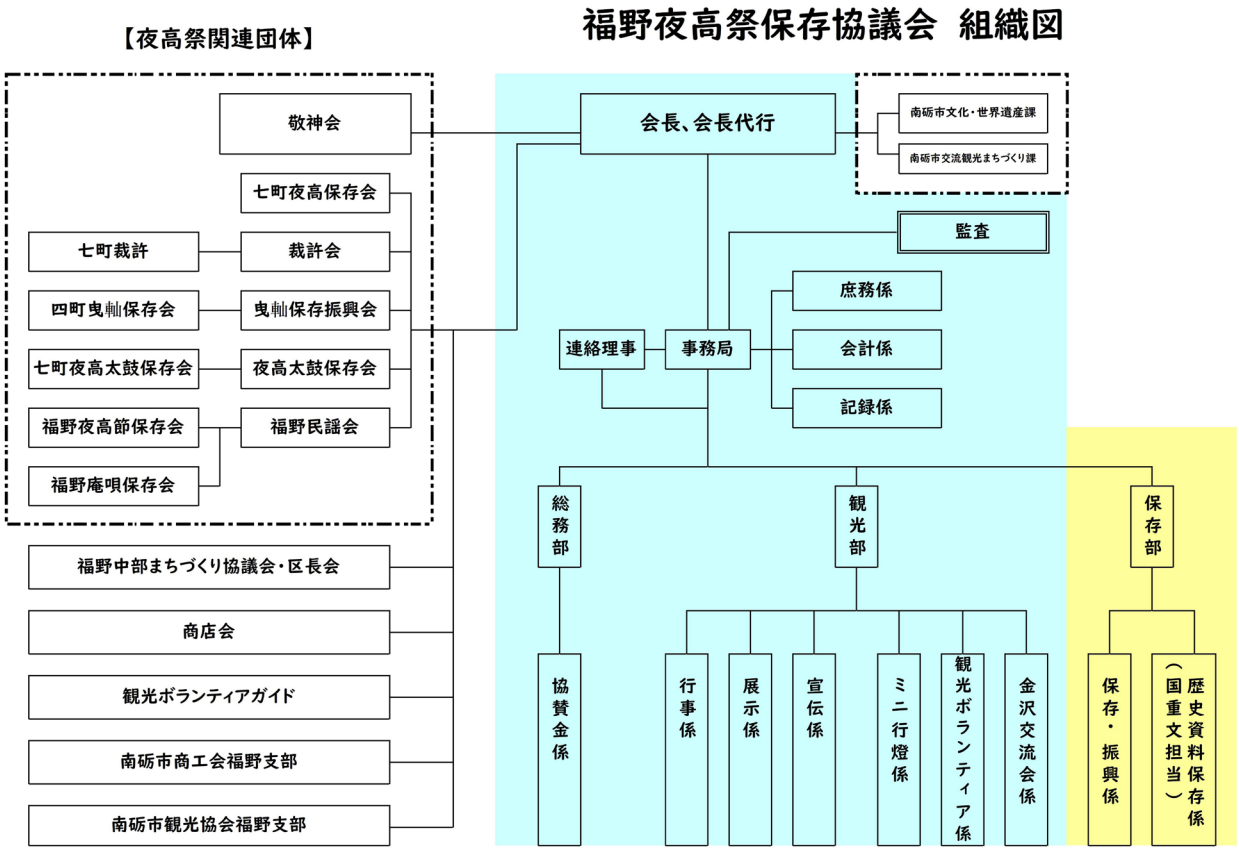


図 2. 福野夜高祭保存協議会（R7 ～ ）組織図

務め、この教室で作製された武者絵は同年一二月に福野のショッピングセンターのア・ミューにて一週間程度展示が行われた（写真１５）。

今後は、資材調達先の変化や少子高齢化といった社会情勢の変化に柔軟に対応しつつ、新たに組織された福野夜高祭保存協議会が中心となって祭礼の保存継承に取り組むことが期待される。

引用・参考文献

阿曽翁三百回忌大法要奉讃会　一九五八　『阿曽三右衛門翁事蹟』
阿南透・広部直子二〇一三「福野夜高行燈のリヨン遠征と『光の祭典』」『江戸川大学紀要』二三号
阿南透　二〇一四　「『となみ夜高まつり』の成立」『江戸川大学紀要』二四号
阿南透　二〇二五　「福野夜高祭における『武者絵』の継承とその利用」『江戸川大学紀要』三五号
石垣悟　二〇二一　「魚津のタテモン行事」『山・鉾・屋台の祭り研究事典』思文閣
伊藤曙覧　一九七七　『とやまの民俗芸能』北日本新聞社
岩尾競談　一九九四「福野夜高」『古老にきく　第二集』福野町教育委員会
植木行宣　二〇〇一　『山・鉾・屋台の祭り―風流の開花』白水社
植木行宣　二〇一〇　「山・鉾・屋台の祭りとその展開」『山車（日本の美術五一六）』至文堂
植木行宣　二〇二一　「総論　山・鉾・屋台の祭りの形成と発展」『山・鉾・屋台の祭り研究事典』思文閣
宇野通　一九九七　『加越能の曳山祭』能登印刷出版部
浦辻一成　二〇〇二　「夜高祭」『富山県の祭り・行事』富山県教育委員会
漆間元三　一九七四　『富山の祭と行事』巧玄出版
越中夜高太鼓保存会　一九九六　『越中夜高太鼓保存会発足三〇周年記念誌　夜高祭』
越中夜高太鼓保存会　二〇一六　『越中夜高太鼓保存会結成五〇周年記念誌　越中富山福野夜高祭』
大西鈴雄　一九三七　「夜鷹祭」『越中郷土研究』八
岡田金　一九九六　「屋台及び囃子記録保存」『ふくの町立て散歩』福野時の会
小矢部市史編集委員会　二〇〇二　『小矢部市史』小矢部市
加藤享子　二〇一八　「昭和初期旧西砺波郡若林村（現小矢部市）西中のヨータカ」『とやま民俗』九〇号
北野潔　二〇〇四「　夜鷹行燈と夜高行燈についてーいつ、なぜ『鷹』が『高』に変わったか―」『富山史壇』一四二・一四三合併号
川岸進、内山吉次談一九九四「芝江川、そのあたりつれづれ」『古老にきく　第二集』編福野町教育委員会
北日本新聞社　一九五四　「「北日本百選」入選発表会」
黒坂富治採録　一九七二　「越中福野　夜高節」
小寺融吉　一九三二　「越中の田舎を歩いて」『旅と伝説』通巻五五号
小林忠　一九六八　「北野社頭阿国歌舞伎図」『国華』九一四号
斉藤五郎平　一九九六　「屋台ばやし」『ふくの町立て散歩』福野時の会
斉藤五郎平　一九七七　『福野郷土史』第五巻　福野町
斉藤五郎平　一九八〇　『福野郷土史』第六巻　福野町
佐伯安一　一九五一　『民俗手帖第五冊』『民俗手帖第九冊』
佐伯安一　一九七六　「福野の夜高と曳山」『富山県の曳山』富山県教育委員会
佐伯安一　二〇〇〇　「福野夜高行燈と砺波平野の田祭り」『祝い絵』石川県立歴史博物館

佐伯安一　二〇〇二『富山民俗の位相』桂書房
島添貴美子　二〇二一「放生津八幡宮祭の曳山・築山行事」『山・鉾・屋台の祭り研究事典』思文閣
庄川町史編さん委員会　一九七五『庄川町史　上巻』庄川町
城端曳山史編纂委員会　一九七八『城端曳山史』城端町
高橋秀雄・漆間元三（編）一九九一『祭礼行事・富山県』桜楓社
堂田歩未二〇二一「鹿島地区の祭り」『砺波今昔物語～ｉｎ鹿島（調査報告書）』
砺波市史編纂委員会　一九九四『砺波市史資料編四　民俗・社寺』砺波市
富山県　一九七三～八四『富山県史』
富山県教育委員会　一九九二『富山県の民俗芸能』
富山県教育委員会文化財課　二〇〇二『富山県の祭り・行事』富山県教育委員会
富山県教育委員会生涯学習・文化財室　二〇〇七『とやまの祭り（とやまの文化財百選シリーズ三）』
富山県神社庁　一九八三『富山県神社誌』
とやまのユネスコ無形文化遺産普及啓発事業協議会　二〇二五『とやまのユネスコ無形文化遺産聞き書き調査報告書』
苗田外幾男　一九六〇『福野歴年誌』
長岡一忠　一九七〇『福野の夜高あんどん雑考』私家版
七ツ屋誕生一五〇周年記念事業実行委員会　二〇一八『七ツ屋誕生一五〇周年記念誌』
南砺市立城端図書館蔵『城端年代記　畑家蔵本写』天正（一五七三）年～享保一八（一七三五）年
仁ヶ竹亮介　二〇二一「高岡御車山祭の御車山行事」『山・鉾・屋台の祭り研究事典』思文閣
西岡陽子　二〇〇八「座敷を飾る―神像・家宝・造り物―」『祭りのしつらい　町家とまち並み』思文閣
西岡陽子　二〇二一「城端曳山祭」『山・鉾・屋台の祭り研究事典』思文閣
西村忠編　二〇一〇「夜高節新歌詞・福野小唄　野口雨情」
野原久仁　二〇〇三『船鉾』明和印刷
新田二郎　一九八五「近世在町の隣保制度について―越中国砺波郡福野町を事例として―」『砺波散村地域研究所研究紀要』第二号
日本放送教会編　一九九二『復刻　日本民謡大観　中部篇（北陸地方）現地録音ＣＤ解説』日本放送出版協会
林宏　二〇〇一「津澤舟方今昔譚」『とやま民俗』五六
深井甚三　一九九五『近世の地方都市と町人』吉川弘文館
福野芸妓組合・福野料亭組合　一九五六『美はしきしおり　邦楽舞踊公演会　於福野劇場』
福野時の会　一九九六『ふくの町立て散歩』
福野文化協会編集委員会　二〇二三『芝水』第五号　福野文化協会事務局
福野町史編纂委員会　一九九一『福野町史　古文書編』
福野町史編纂委員会　一九九一『福野町史　通史編』
福野町史編さん委員会　二〇〇五『続　福野町史　通史編』
福野町ヘリオス音楽祭実行委員会　一九九七『混成合唱曲　夜高幻想』
福野夜高保存会　二〇〇三『万燈』

福野料理屋組合　一九五三　『芸妓溫習会公演　昭和二十八年四月五日晝夜　福野劇場　主催福野料理屋組合　後援福野芸妓組合』
福原敏男　二〇二一　「序『山・鉾・屋台』と山車　京都祇園祭の相対的理解のために」『山・鉾・屋台の祭り研究事典』思文閣
布袋和彦監修資料「福野夜高節　歌い方を知ろう」（年代不明）
藤本武　二〇一七　「福野夜高祭―神を迎える壮麗な行燈」『富山の祭り』桂書房
堀江英一　二〇一四　「富山県の小学校校歌をつくった人たち～作詞者及び作曲者の観点から～」『富山国際大学子ども育成学部紀要』第五巻
堀江英一　二〇一六　「富山県の中学校校歌をつくった人たち～作詞者及び作曲者の観点から～」『富山国際大学子ども育成学部紀要』第七巻
三田村佳子　二〇一〇　「越後の『灯籠押し』―下越地方における灯籠風流の展開―」『信濃』六二巻一号
三田村佳子　二〇一八　「北信濃の『灯籠揃え』―多様化する灯籠風流―」『民俗芸能研究』六五号
三田村佳子　二〇二一　「福野の夜高祭」『山・鉾・屋台の祭り研究事典』思文閣
村木桂子　二〇一八　「福野神明社所蔵《北野社頭阿国歌舞伎図屏風》の美術史的意義について」『関西大学東西学術研究所紀要』第五一輯
森河由伎夫　二〇〇七　「福野の夜高節考」
米原寛　二〇二〇　「富山県の山・鉾・屋台行事」『放生津八幡宮祭曳山行事・築山行事総合調査報告書』射水市教育委員会

その他、調査の実施から本書の作成に至るまで、文化庁文化財部伝統文化課民俗文化財部門藤原洋調査官をはじめ、左記の団体・個人の方々から貴重なご指導・ご教示をいただくとともに、資料提供・閲覧および情報提供にご協力をいただいた。記して謝意を表したい（順不同敬称略）。

・団体

文化庁　富山県　富山県教育委員会　南砺市文化財審議会
福野夜高祭保存協議会（旧福野夜高保存会・福野夜高祭連絡協議会）
七町の各夜高保存会　上町夜高保存会　七津屋夜高保存会
新町夜高保存会　浦町夜高保存会　辰巳町夜高保存会
横町夜高保存会　御蔵町夜高保存会
福野曳山保存振興会　上町・七津屋曳山保存会　新町曳山保存会
浦町・辰巳町曳山保存会　横町曳山保存会
敬神会　越中夜高太鼓保存会　安居大神太鼓保存会
福野中部まちづくり協議会　福野民謡会　福野庵唄保存会
福野神明社　岩武雄神社　柴田屋日吉社　恩光寺
富山大学　富山県立図書館　富山県公文書館　金沢市立玉川図書館
南砺市観光協会　南砺市商工会

・個人

花島栄一　大塚保夫　大塚敞一　中川五月　丹羽良一　堀部友一
中村秀雄　清島　健　島田辰男　森田勝彦　村澤修一　梶井利一
石見昭友　新山俊英　金谷孝一　中川　敬　林　剋晴　森田嘉樹
長谷川一司　藤本秀清富　梧桐雄介　布袋泰博　島田錦子
水島政光　西賢一郎　苗田　浩一

また、本調査事業を進めるにあたり、各町で「世話人代表」として各町への調査の際の窓口になっていただく方を選任していただいた。左記の世話人代表の方々には、貴重な情報提供と惜しみないご尽力いただきましたこと、深く御礼申し上げます。

上町　世話人代表　勢濃　力男
七津屋　世話人代表　川崎　肇
新町　世話人代表　川岸　眞（途中より前山　昌三）
浦町　世話人代表　佐竹　泰則
辰巳町　世話人代表　厚村　優
横町　世話人代表　澤田　義勝
御蔵町　世話人代表　中川　宏

福野夜高曳山行事関係年表

慶安二年（一六四九）	六月、阿曾三右衛門らによる町立ての願書提出。
慶安三年（一六五〇）	一月、福野町立ての許可がおりる。
慶安五年（一六五二）	二月、福野新村大火により六四戸焼失。四月、福野神明宮、伊勢から御分霊勧請の帰途、倶利伽羅峠付近で日が暮れ、氏子達が手に行燈を持って出迎えた。これが「夜高行燈」の起こりとされる。
承応三年（一六五四）	この年、春祭りとして始まった行燈行事が、「夜高祭」のはじまりとされる。
文化一二年（一八一五）	献燈宮参りの際に、お札を納めることをこの頃から止める。
文政四年（一八二一）	この年より、上町にて『やたい稽古并中入等記帳』の記録が始まる。この史料の存在によって、文政年間初期には確実に曳山・屋台の巡行が行われていたことが分かる。
天保三年（一八三二）	この年、五月祭を六月一、二、三日まで延長し、福野神明宮の御遷宮百年祭を同時に執り行う。六月、現在の福野神明社社殿が建設され、その経緯が「福野神明社遷座祭祝詞」として残される。
天保八年（一八三七）	この年の祭礼では、天保の大飢饉の影響により曳山・屋台ともに出されなかった。
弘化三年（一八四六）	二日町屋万右ェ門に男子出生につき、五月祭りに献燈主として浦町に行燈一本が贈られる。
弘化四年（一八四七）	この年、『御神輿御供行列之次第』が編纂される。また横町曳山修繕のため井波屋甚助等が各組に
嘉永五年（一八五二）	て毎日掛金を始め、これが福野町の毎日銭の初めとなる。 この年、『神明宮様御巡見并曳山等仕候中入夜喰等諸事記録』が編纂される。本史料の中に見える「御蔵町御神燈之才許人」という記述が、夜高行燈の確実な初めての記述とされる。
安政元年（一八五四）	この年初めのペリー艦隊再来・日米和親条約締結に伴う騒動の余波を受け、曳山・屋台ともに出されなかった。
文久二年（一八六二）	福野神明宮神輿渡御巡行の大傘鉾を模装し、横町、新町、下町（浦町）に一六枚張りの田楽で高さ四丈の大行燈が出される。
明治七年（一八七四）	横町屋台を新調。古い屋台を一七円五〇銭で戸出に売る。
明治八年（一八七五）	新町曳山の車輪が、三尺五寸の内輪だったものを、四尺七寸の外輪に改造される。
明治九年（一八七六）	子供燈鉾およそ百燈神前に供奉し、町内に持ち回り帰町。五月、田中文造男子出生祝に献燈主として上町に行燈一基贈る。
明治一三年（一八八〇）	十六枚張りの田楽が一六円で中川茂右門（旧中川松竹園）に売られる。
明治二〇年（一八八七）	五月一日、上町七基、新町五基、浦町七基、横町八基、計二七基の行燈をかつぎまわった。またこの年、横町曳山の山蔵が竣工する。
明治二二年（一八八九）	福野神明社参道入り口の灯籠を設置（元は横町

明治二六年（一八九三）　通りに出ていた）。この灯籠は今は参道にある。前年より電線が張られたため、四月三〇日に行燈の高さ二丈五尺と制限されたが実行されない。また五月一日、行燈神明宮に至らぬ先に、横町橋東において大乱争が起こり、取締官を芝井川に投げ入れ、水中でもみあう。

明治二八年（一八九五）　五月一日、御蔵町行燈、浦町桂井他八郎前（現在の北銀の駐車場付近）において倒壊焼失し、相手方浦町を告発、浦町詫書と弁償で和解成立する。この年、「祭礼献燈取締書」が出される（これは一七力条よりなり、以後、祭礼の基本的な規約とされ、裁許達によって代々守られている）。また、行燈の町回りが横着となってきたので、各町端まで回った証明を貰う家を決める。横町端は梶井助太郎、浦町端は河合要三、上町端（七津屋）は村上次郎八、新町端は梧桐甚太郎、御蔵町端は小西嘉右衛門、辰巳町端は江上甚太郎まで。

明治二九年（一八九六）　五月祭の行燈（敬観燈）の台棒の長さは三間、横棒は六尺、丈は二丈四尺以下で、田楽の大きさは大奉書九枚張り以下とされたが、励行されなかった。御蔵町で初めて屋台が出される。

明治三一年（一八九八）　前年度の米作虫害のため、この年各町では屋体が出されなかった。

明治三三年（一九〇〇）　前田利家公の三百年祭に横町行燈一本を金沢市へ貸与し、指導者も派遣した（行燈は荷車で運ばれた）。

明治三六年（一九〇三）　四月、浦町・辰巳町の曳山山蔵が竣工する。祭礼では浦町四十八歌仙が根元より折れた。八月、福野神明社幣拝殿屋根の葺き替えが行われた。

明治四〇年（一九〇七）　上町で日露戦役平和を祝するため、凱旋門の山車を作る。下方二間四方高さ三間半総長七間半。

明治四一年（一九〇八）　神明社に大相撲興行番付を奉納。西方寺境内で江戸大相撲が興行される。横綱は梅ケ谷。

明治四二年（一九〇九）　八月末、警察から電話線架設により、行燈の高さ制限、励行の厳達があった。

明治四三年（一九一〇）　前年九月一日、電話線架設により行燈の高さ二丈一尺に、警察官立会で芯木の検尺、切詰が実行された。以後、田楽は六枚張りとなる。

明治四四年（一九一一）　この年に出された「北陸タイムス」五月一日の記事が夜高行燈の由来を物語る最も古い史料として知られる。

大正三年（一九一四）　前年は明治天皇の崩御、この年は昭憲皇太后の死去による諒闇のため連続して行燈の練り廻しがなかった。神輿巡幸はあり神様宿は朝山豊太郎方で、宿は畳を全部新しくして一七人〇もの御供人足に御馳走し、酒は制限なし、経費は二百円以上（米一石一〇円七十銭）かかったという。

大正四年（一九一五）　五月一日夜、浦町と新町が西方寺前で大喧嘩が起こす。双方の行燈は滅茶滅茶となり、新町に重傷者一名が出る。

大正九年（一九二〇）	四月、横町町内の有志により曳山の猩々・童子人形、鼓、衣装、前飾等が新調・寄付される。一一月、福野神明宮の石垣両端に石柵が設置される。
大正一四年（一九二五）	福野神明社に高さ六ｍの鳥居設置される。
昭和元年（一九二六）	夜高行燈の喧嘩、小競り合いで、重傷者一名が出る。
昭和二年（一九二七）	大正天皇の崩御に伴う諒闇中のため、行燈の練り廻しや曳山・屋台の巡行は中止となる。
昭和四年（一九二九）	五月一日、神明社手前右に「神明社」石標柱。
昭和五年（一九三〇）	五月、神明社神輿御巡幸の中入所を旧福野町公会堂と定める。
昭和七年（一九三二）	五月三日未明、七津屋、新町側が横町行燈を倒壊破棄し告訴される。新町、七津屋、横町の関係者二〇数名、傷害罪・暴行罪で取調べを受け起訴される。このため、三日は御輿の渡御のみで曳山・屋台の巡行は中止となる。
昭和八年（一九三三）	この年、詩人の野口雨情が、福野小唄とあんどんの歌を数首つくる。
昭和九年（一九三四）	三月、福野神明社前水路への芝江川からの取水工事が竣工する。
昭和一〇年（一九三五）	この年に撮影の写真、神明社入口の鳥居が現在の「神明型鳥居」。
昭和一一年（一九三六）	五月、夜高節及び福野小唄が富山放送局から全国へ放送される。
昭和一二年（一九三七）	福野神明社拝殿が銅板葺きに改築される。
昭和一三年（一九三八）	日中戦争開始のため子供行燈のみ出す。
昭和一六年（一九四一）	この年、軍への慰問献納映画『富山県銃後進軍譜』を製作するため、北日本新聞社が高岡の御車山行事と福野の夜高曳山行事のトーキー撮影を行った。
昭和二〇年（一九四五）	空襲激化のため、各町とも夜高行燈を出さなかった。
昭和二一年（一九四六）	終戦後、物不足のなか、北国染工から染料を調達して行燈が出された。
昭和二二年（一九四七）	上町では、戦後初めて高御座大夜高行燈と幼児行燈を出す。
昭和二三年（一九四八）	島田豊年、夜高あんどん踊りを振付け。藤間勘初栄振付夜高行燈踊り高岡博覧会に出場する。
昭和二四年（一九四九）	福野商工会、開町三百年祭を機に夜高行燈優美投票（現優美・勇壮夜高行燈コンクール）を始める。行燈灯もろうそくから電球にかわり始める。
昭和二五年（一九五〇）	福野夜高保存会が設立される。以後、行燈コンクールは各町夜高保存会が受賞する形となる。
昭和二六年（一九五一）	五月二日深更、上町（林智雄宅前付近）において、七津屋と横町の行燈が行違い競い合いの時、即死一名、重傷一名、軽傷一名を出す。
昭和二七年（一九五二）	九月九日、福野神明宮御遷宮三百年祭の折、上町と浦町の屋台が町中を巡行する。
昭和二八年（一九五三）	五月一日、御蔵町の行燈が優美投票で五年連続一等を獲得する。

昭和二九年（一九五四）	横町にて曳山巡行の計画があったが中止。北日本百選の踊りの部で五位入選。
昭和三一年（一九五六）	五月一日、夜高保存会が行燈撮影コンクールを始める。一一月七・八日、中部小学校において夜高行燈資料展覧会を開催する。
昭和三二年（一九五七）	五月三日午前一時、四ツ角で辰巳町行燈（龍宮城）が、七津屋行燈とせり合い倒伏破毀された。七月六日、夜高節、ビクター・レコード専属歌手鈴木正夫吹込みで完成発売する。九月一〇日、夜高総踊り大会があり、盛賑だった。一〇月、上町通りの道路拡張改良のため、各戸切り取り改築に取り掛かる。
昭和三三年（一九五八）	夜高あんどん踊り、中部日本民謡競演会で二位の成績を納める。八月八日、上町通り六・五メートル拡張舗装が完成し、祝賀祭が挙行される。
昭和三四年（一九五九）	五月二日午後、夜高行燈四ツ角付近に集め、天然色（カラー）観光映画撮影する。五月二三日、片山甚吉、ＮＨＫに資料を送り、福野夜高祭をTV放送で全国に紹介する。一〇月二四日、商工祭、役場前にて各町内夜高踊競演会を行う。一〇月、七津屋通りが舗装される
昭和三五年（一九六〇）	五月一日、内山達雄氏が、神明社前に明治九年製作の七津屋一六枚張り田楽行燈を献灯する。七月、新町通り道路拡張舗装工事のため、家屋店舗を切り取り改装。
昭和三七年（一九六二）	福野夜高祭が無形文化遺産に指定される。
昭和三八年（一九六三）	砺波信用金庫本店が落成、辰巳町通りの舗装ができる。
昭和四〇年（一九六五）	六月、新町曳山の山蔵が竣工し、九月一八日に落成式が行われる。
昭和四一年（一九六六）	一一月、夜高太鼓保存会が結成される。新町、御蔵町、旭町の各通りの舗装が完成する。
昭和四五年（一九七〇）	五月、長岡一忠氏が「福野の夜高まつり雑考」を出版する。
昭和四八年（一九七三）	五月、約五〇年ぶりに上町・七津屋の曳山の巡行が復活する。一〇月、夜高行燈が東京の銀座祭りに出演する。テーマは「ふる里の祭を銀座で見よう」で、夜の部に四町各一本ずつ参加。町民二五〇人の練り廻しでにぎわう。
昭和五〇年（一九七五）	この頃より大行燈の車輪にベアリングが入る。それまでは日毎に車輪を外し手入れしていた。
昭和五三年（一九七八）	十月、夜高太鼓が京都で開かれた民俗芸能大会に出演する。
昭和五五年（一九八〇）	この年、辰巳町通りの入口が拡張される。
昭和六一年（一九八六）	ＮＨＫ「東海北陸」で福野夜高祭が三〇分番組で紹介される。
昭和六三年（一九八八）	富山市のます寿し製造「源」観光用レストハウスに、新町制作の神輿行燈が常設展示される。
平成元年（一九八九）	夜高行燈、名古屋市制百年祭に参加（上町・浦町が参加）。

平成二年（一九九〇）　三月、竹下内閣ふるさと創生資金で猿ヶ辻公園に「夜高まつり」シンポルタワーができる。

平成三年（一九九一）　三月、新たにオープンした福野文化創造センターへリオスに横町制作行燈一基常設展示される。八月、辰巳町・七津屋行燈が、姉妹都市多度津町町制百周年記念「たどつまつり」に参加する。

平成四年（一九九二）　記念に御蔵町中行燈が寄贈される。

平成七年（一九九五）　ＪＥＴ福野の日に、上町・浦町の行燈が参加。

平成八年（一九九六）　四つ角に行燈の壁画が描かれる。

平成一二年（二〇〇〇）　神戸祭りに横町、京都祭りに横町・浦町が参加。

平成一三年（二〇〇一）　四月、文久の大行燈の製作・展示が行われる。夜高三五〇周年を翌年に控え、再設立された夜高保存会を中心に各種記念事業が進められる。一二月、上町・七津屋曳山の山蔵が新たに竣工する。

平成一四年（二〇〇二）　夜高三五〇周年記念事業として、三月二三日、裁許、若連中ほか七町内有志計一二七名伊勢へ崇敬参拝。宇治橋大鳥居横に、文久大行燈を早朝より飾り、夜一〇時まで点灯する。夜高三五〇年記念酒を発表する。「いきいき富山伝統芸能フェスタ」（富山市）に浦町大行燈が展示される。

平成一五年（二〇〇三）　三月、夜高三五〇周年記念誌「万燈」発刊される。

平成一六年（二〇〇四）　四月、夜高祭前夜祭に文久大行燈を初めて練り廻す。七月、福野の夜高祭が富山県無形民俗文化財に指定される。一一月、福野町を含む八町村が合併して南砺市が成立する。この年、四基の曳山が福野町有形民俗文化財に指定される。

平成一七年（二〇〇五）　新町および浦町・辰巳町の曳山の巡行が復活し、約七十年ぶりに四基の曳山が揃って巡行が行われた。

平成一九年（二〇〇七）　三月、富山県教育委員会「とやまの祭り百選」に選定。

平成二〇年（二〇〇八）　一一月、全日本菊花連盟全国大会が福野体育館で開催され、会場前に文久大行燈が展示される。

平成二一年（二〇〇九）　四月、金沢市への出向宣伝ＰＲを実施する（文久の大行燈の練り廻し）。

平成二二年（二〇一〇）　二回目の伊勢神宮参拝が行われ、現地で文久大行燈を練り廻した。八月、第二回富山県曳山サミットが福野へリオスにて開催される。

平成二三年（二〇一一）　十二月、フランス・リヨン市の「光の祭典」に招待を受け、大行燈二本と小行燈二本がリヨン市内を練り回した。

平成二五年（二〇一三）　七月、福島県南相馬市の震災復興支援のため、「福野夜高行燈南相馬市支援遠征事業」として小行燈が「相馬野馬追」に参加して練り廻しを行った。八月、二〇年に一度の式年遷宮に合わせ三回目の伊勢神宮参拝が行われ、中行燈二本（横町・七津屋）と小行燈（新町）が外宮を練り廻した。

平成二六年（二〇一四）　二月、住民と一体になった独創的で熱心な取り組みにより地域に元気と希望を与えたとして、

平成二七年（二〇一五）	連絡協議会が地域再生大賞優秀賞を受賞した。一〇月、保存会が地域文化功労者文部科学大臣表彰を受賞。一一月、武蔵野市との交流事業として、「武蔵野市・南砺市『なんと秋祭り』ｉｎ吉祥寺」に、上町・七津屋・新町・辰巳町の行燈が参加して練り廻しを行った。
平成二九年（二〇一七）	九月、組立方法の伝承を目的として、横町の屋台の一時的な組立が行われた。七月、二回目となる「福野夜高行燈南相馬市支援遠征事業」を実施。一二月、夜高祭連絡協議会が推進する「福野夜高祭～『災厄からの復興の心』を引き継ぐプロジェクト～」が、日本ユネスコ協会連盟の「プロジェクト未来遺産」に選ばれる。
令和二年（二〇二〇）	四月、新型コロナウイルスの大流行により緊急事態宣言が出される。そのため、行燈は既に制作途中であったが、この年戦後では初めて夜高行燈の練り廻しが中止となる。
令和三年（二〇二一）	五月、昨年度に引き続き感染症対策のため、規模を大幅に縮小して祭礼が行われた。また、横町でのみ小行燈の練り廻しが行われた。
令和四年（二〇二二）	五月、三年ぶりに全七町が行燈を練り回した。ただし、引き続き感染症対策のため規模縮小での開催であった。この年、文化庁の地域文化財総合活用推進事業補助金を受け、四基の曳山全てが修繕を実施した。またこの年から福野夜高曳山行事総合調査が開始された。
令和五年（二〇二三）	五月、四年ぶりに制限なしの祭礼が行われ、出店や夜高太鼓の特別ステージが復活した。また昨年度に引き続き、地域文化財総合活用推進事業補助金を受けて上町・七津屋と横町が曳山の修繕を行った。
令和六年（二〇二四）	一二月、福野夜高保存会と福野夜高祭連絡協議会が統合されて福野夜高祭保存協議会が発足した。
令和七年（二〇二五）	この年、福野夜高祭保存協議会による武者絵教室が始まる。
令和八年（二〇二六）	三月、『福野夜高曳山行事総合調査報告書』が発刊される。

福野神明社春季祭礼　福野夜高曳山行事総合調査報告書

2026 年（令和 8 年）3 月　発行

編集・発行　　南砺市役所文化・世界遺産課

〒 939-1692 富山県南砺市荒木 1550 番地

TEL 0763-23-2014 FAX 0763-52-6349

印　　刷　　キクラ印刷